

9. ジンバブエ共和国

1) 政治・経済・民生の動向

独立年月日：1980年4月18日（旧宗主国イギリス）

首都：ハラレ（Harare、旧名ソルスベリ、人口約100万人）

面積：39万600km²（日本よりやや大きい）

人口：913万人（1989年推定、うち白人14万人）

人口密度：23人／km²

人口増加率：年間2.9%

部族：ショナ族(75-80%)、ヌデベル族(15-20%)

言語：英語（公用語）

宗教：部族宗教およびキリスト教

地勢：ジンバブエは北側をザンベジ川、南側をリンポポ川に挟まれ、東部にはサビ川支流が広がる内陸国。同国の南西部から北東部に広がる中央高地は、高度1

200 m以上で、比較的雨量もあり農業に適している。

気候：緯度的には熱帯に属する内陸地域であるが、国土の大部分が高原であるため、気候は亜熱帯となっており、温暖で快適である。降雨はごく一部を除き10月から4月（夏期）に限られ、年間平均降雨量は700mm、最も暑い季節は10月（平均最低最高気温16-28℃）である。最も涼しい季節は冬季の6月と7月（7-21℃）である。

政治：共和制、元首は大統領（Robert G. Mugabe）

軍事：総兵力4.7万人、国防費4.24億米ドル

経済：主要産業

製造業（国民総生産の25%）；繊維、食品加工、衣料、家具木工品、化学・石油製品、紙および印刷、金属等加工、輸送機械

農林業(GDP14%)；葉タバコ、メイズ、綿花、砂糖、小麦、コーヒー、大豆、ソルガム、落花生、ひまわり種子、牛肉

鉱業（GDP7%）；金、石炭、石綿、ニッケル、銅、クローム、鉄、銀、錫、コバルト等

：経済成長率（出典：IMF）

年	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
%	-3.6	2.3	7.3	2.2	-1.1	6.5	4.9

：貿易 総額；30億ドル、輸出；17億ドル、輸入；13億ドル(1990)

：予算 歳入；26億ドル、歳出；32億ドル

ジンバブエは豊富な鉱物資源、農産物資源および水資源に恵まれ、また製造業もサハラ以南アフリカ諸国の中で南アについて発達・多様化し、必要な消費財の多くを生産。主要道路・鉄道・電力施設等のインフラストラクチュアも比較的良く整備されており、発達した金融・流通

担当：池田 俊彌

制度、質の高い労働力、比較的高い行政能力もある。このようにブラック・アフリカ諸国の中でも最も恵まれた経済発展の条件を備えている。

現在の問題は①干ばつによる水不足、②エイズ（労働人口の30%、新生児の40%HIV+、0-4才で死亡）、③南ア依存体制（原材料、加工品とも南アに依存、南アからザンビア、マラウイへの流通拡大があればジンバブエのインフラが生かされる）、④人材流出（内貨の価値が過去2年間で半分に下落、南ア、ボツワナ、ナミビアの好条件が人材の流出を加速、特に大学の先生の流出が問題）、が挙げられる。

政府は昨年度より経済構造改革に取り組むとともに、公務員1万人（人件費の25%）削減、省庁・公社の統廃合、内・外貨のギャップの減少等を実施している。海外援助関係では、他国に見られる政治家の私財蓄積は無く、資金協力の効果は非常に高いとされている。

2) 農林業動向

ブラックアフリカ唯一の農産物自給国。独立前は人口の70-80%がCommunal Area（共同体地域、全土の40%）に居住。現在でもこの状態に余り変化は無く、人口増、寡雨、過放牧、貧土のため低生産、低収入。一方、商業農業地帯は全土の36%であるが、現在でも4,300家族のCommercial Farmer（商業農家、大部分は白人）によって占有されている。

世界農業白書

4500の大規模農場；1350万ha（1農場当り3000 ha）、労働者170万雇用

8500の小規模農場；150万ha（1農場当り176 ha）

4000000の共同体農家；1600万ha（1農場当り20 ha）

(1) 農業

1989年現在、年間の農業生産は20億ドル、総生産の20%を維持している。生産は他の多くの熱帯諸国と異なり、多様化している。価格的にはタバコ、メイズ、綿、砂糖が主要産物である。

* メイズの生産量は雨量により異なるが0.5-2.0 m ton(約1億ドル)。しかし、現在(1991年)では、価格的に有利なタバコへの転作により、輸入せざるを得ない状況がある。

* タバコ生産は1980年より増加の一途をたどっており、そのほとんどは輸出される。

* 綿は地域の衣料原料として供給されるが、いまだ70%が輸出されている。綿実油はジンバブエにおける植物油の50%以上を占める主要資源である。

〔共同体地域の農業・食料問題〕：国全体としては食料自給線上にあるものの、人口の大部分を占める共同体地域の農牧生産はきわめて低調である。その理由は、①自然環境：降雨少なく(300-600mm)、土壌は砂質で地力に乏しい上に、侵食が激しく水源に恵まれない、②栽培技術：伝統農法の欠陥（栽培、体系、管理）、貧弱な放牧草地、技術指導の低調さ、③作柄の不安定：雨期中の小乾期によるものが多い、④支援体制：農協が弱く、農業金融の道が狭い、また試験研究面に蓄積が浅い（1990年に共同体地域を対象とするようになった）等である。このように、干ばつ対策をも含め食料の安全対策は十分でない。

政府の農業開発計画では、灌がい事業、転換作の推進、欧州市場への進出が挙げられ、SADCC（南アフリカ開発調整会議）における園芸研究等が新しい方向としてうちだされている。

(2) 畜産業

通常、牧場あたり1000-2000(or 5000)頭の牛が飼われており、EECに牛肉が輸出されている。年間の屠殺頭数は牛50万頭である。共同体地域では家畜は畜耕、運搬用の他は財産保有の役割が強く、市場出荷は極めて少ない。Commercial Farmersは豚および羊各10万頭、Communal Farmersは豚8万頭、羊30万頭以上を保有している。

共同体の農家は放牧地を共同使用するが、草地面積は1家畜単位あたり1-2haと少なく、明らかに過放牧である。彼らの多くは雨量の少ない地域に居住し、主として山羊を飼っているが、山羊は草を根こそぎ食べるため草資源の枯渇がより一層加速されている。

耕地と牧草地の境界においてはより集中的な土地利用の圧力がある反面、より乾燥した地域では牧牛に変わって野生動物の利用に向かう傾向がある。

(3) 林業

森林には水分保持、斜面あるいは農地の土壌流亡、砂嵐の発生等を防ぐ機能があるが、この機能を持つ森林は全土の1%以下であり、森林区として保護されている地域は2.4%にすぎない。経済林は11.5万haで、主として外来種のマツ、ユーカリ、アカシアで構成されている。木材は建築材、垣根、電柱、家具、紙生産に利用されており、これらの用途には自給可能である（但しより良質の硬質材は輸入している）。これは木材を利用する産業が未発達であることによる（製紙工場が極めて少ない等）。林業省は5か年計画（6千万ドル）で地域の森林造成、再生、郷土樹種林の管理等を試みており、また、森林の多目的利用は林業省の目的の1つだが、その進展度は遅々としている。

他方、アグロフォレストリーによる環境の修復には多くの利点のあることが解っているが、苗木供給、苗畑での水不足、ヤギによる加害、全ての土地を作物生産に使うという既成概念等により未だアグロフォレストリーの試みは広く浸透していない。

木材はジンバブエにおける最も重要な燃料であり（1982年には77%の木材が燃料に、19%が主として電柱に使用された）、600万以上の人々が必要としている。年間4百万トンが消費されているが、これは10万haの森林を皆伐した量、200万haの森林あるいは2千万haの疎林の成長量に相当する。このため、現在8州の内の4州で供給量が需要量を下回り、10年以内には極めて低密度の地域を除き、殆ど全ての地域で燃料不足の事態となることが予想されている。

3) 国立農業研究機関(NARS)の現況

(1) 農業研究機関

Department of Research and Specialist Services-Ministry of Agriculture

Research Services Division

Chemistry and Soil Research Institute	Pro. 25	Tech. 36
Institute of Agricultural Engineering	8	14
Plant Protection Research Institute	17	19
Crop Research Division		
Agronomy Institute	12	11
Cotton Research Institute	8	7

Crop Breeding Institute	12	6
Horticulture and Coffee Research Institute	6	6
Lowveld Research Station	7	8
Livestock and Pastures Division		
Glassland Research Station	5	9
Henderson Research Station	9	7
Matopos Research Station	10	10
Makoholi Experiment Station	2	4

5000 ha以上の面積を持つCommercial Farmerは農業適地に立地しているし、資本もあるうえに、ダムの水を利用した灌漑施設も備えていることからどんな作物でも栽培が可能で、殆ど問題はない。一方、旧来からの土着の農業を行っている小規模の大半の農家は、農業の限界地域に立地している上に、灌漑施設を持たないことから、5 haに足りない、天水に頼る畑作と、生産力の低い周囲の草地を利用した家畜の飼養が主であり、近年の異常気象による降雨不足と過放牧によって、益々生産力が低下し、状況が悪化している。このような状況下、国立試験研究機関は後者に属する伝統的農業を基盤にした農地の生産力の向上、および農家の生活安定のための換金作物の栽培技術を向上させる政府方針に則った研究を指向し始めた。しかし、降雨が少なく、狭くて生産力が低い土地で、自給に必要な穀類から家畜飼養に必要な牧草あるいは飼養木まで育て、全体として地力の向上を図ろうとする研究目的は魅力的に見えても非常に困難な課題である。それにもかかわらず、各研究機関ではこのような視点にたった研究を一步一步進めていこうとしている。日本に期待されているのもこのような視点にたった息の長い研究協力である。

①草地試験場(Grassland Research Station)

草地研究の中心、圃場面積：2700 ha

研究者：30名、作業員：118名

主要研究プログラム：(イ)放牧におけるギンネムの利用、(ロ)アルファルファの適品種選定試験、(ハ)マメ科牧草の導入による自然草地の改良試験、(ニ)イネ科、マメ科牧草の採種試験、(ホ)放牧牛への新飼料給与試験、(ヘ)バナグラスの評価試験、(ト)羊の飼養技術の確立試験、(チ)アグロフォレストリー樹種の選定試験

②マコホリ試験場

砂質土壌における作物、畜産、草地研究の中心、2500 ha

主要研究プログラム：(イ)家畜の育種、(ロ)家畜栄養、(ハ)乾燥条件下での肉牛生産と山羊乳生産、(ニ)マメ科牧草とイネ科改良品種による草地の改良、(ホ)飼料木の導入と評価、(ヘ)マメ科牧草品種とバナグラスの特性評価

共同研究：トウモロコシ適品種選定試験 (CIMMYT)、ソルガムおよびパールミレットの改良試験 (SADCC/ICRISAT)、アグロフォレストリー (ICRAF)

(2)森林研究所

ジンバブエの森林・林業研究の唯一の機関として、全ての分野をカバーしているが、現在特に力を入れている分野は、種の導入、熱帯マツおよびユーカリの遺伝的改良、国内外の育種計

画のための大規模な種子生産ユニットの構築、である。全体的な問題としては、研究人員の不足が最も重要である。

Tree Breeding(2,2) Silviculture(1,1) Seed(1,3) Biometrics(2,2)

Agroforestry(2,1) Pathology and Entomology(2,1) Mapping and Inventory (3,1)

Total (Prof.13 Tech.11)

Donor-funded Projects:

IDRC(Canada) -"Dry Zone Afforestation", Phase II(1987-91)

-"Regional Seed Center", Phase II(1989-92)

ACIAR(Australia) -"Australian Hardwoods for Fuelwood and Agroforestry",
Phase II(1988-91)

Ford Foundation -"On-farm Agroforestry Pilot Project", (1988-91)

EEC(Europe) -"Southern African Wood Studies"(SAWS)(1989-92)

SAREC(Sweden) -"Ecology and Management of Indigenous Forests"(1990-93)ODA(UK)

-"Institution Strengthening and Staff Development"(1990-93)

SADCC/ICRAF -"Development of Agroforestry Technologies for Small-
scale Farmers"(1990-)